

戦時体験記録集＜第25集＞

二度と戦争を繰り返さないため

大切な人の命を守るため

何が起こっていたのかを 知ってください



戦争になると 人が人ではなくなります 命が命ではなくなります

はじめに

◇「戦争体験を語り継ぐ集い」とは

戦争を知らない、のちの世の人たちのために、戦時下での暮らしや、軍隊生活の実際、危険と隣り合わせの現実があることを、伝えています。また、体験者ご自身に直接語っていただくことの重みを大切にしています。命の大切さ、平和のありがたさへ思いを馳せる機会になることを願いながら、毎年開催しています。

この集いは、名古屋市緑生涯学習センター主催の事業で、進行は「戦争体験を語り継ぐ会」が担当しています。行政と市民が協働した取り組みを続けています。

この冊子を手にとってくださる皆様からも、平和への祈りが広がりますように。

◇戦時体験記録集について

体験として語られる言葉を記録として残す大切さがあります。語り継ぎタイムで話される言葉は、生き生きとして心深くに響いてきます。けれども、その場にいる人にしか伝わらず、耳から聞いたことは、いずれ消えていく運命にあります。こうして文字にすることにより、集いに参加できない人たちへ、後からの人たちが読み返すことができるように、読み継いでいただけるように、願いを込めて作成しています。

◇冊子「飛翔」について

「飛翔」は年4回発行され、戦中戦後の様子が多く書かれています。私たちと共通する思いが綴られている文章を、お許しを得て掲載しております。

「飛翔」は夏梅誠一さまよりお届けいただいている冊子です。夏梅さまは長年「戦争体験を語り継ぐ会」をリードくださった橋詰四郎さんと親交があり、戦地でご苦労を共にされた方です。しかし残念ながら、夏梅さまは今年で筆を置かれることになり、この25集には最後の3編を掲載させていただきました。長年のご協力をありがとうございました。

今年も「戦争のない平和な世界を！」との熱い思いと、賛同していただいた皆さまのご協力により、戦時体験記録集が完成いたしました。感謝申し上げます。

戦争体験を語り継ぐ会 一同

◆目次◆

語り部さん

あゝ悲愴 雲南の空に散る 回想録より抜粋（伊藤万平）	- - - P1
有松裏に捕虜収容所があった（佐野みつ子）	- - - - - P3
戦病死があいついだ中国戦線（伊藤芳雄）	- - - - - P4
一兵士の目線から実感するものー 『日本軍兵士ーアジア太平洋戦争の現実』より（吉井弘和）	- - - P5

飛翔より

それから私たちは（その6）・（その7）ともかせぎ（その1） （その8）ともかせぎ（その2）（夏梅誠一）	- - - - - P7
老耄つれづれ（16）病歴・病院・意思のことなど（2）（長井大）	- P12

戦時体験記録

戦闘中負傷現認書（橋詰四郎）	- - - - - P15
父親のような兵を殴る若い将校（竹内登美子）	- - - - - P17
毎日が芋など入ったご飯の思い出（緒川文子）	- - - - - P19
銃後の暮らしの体験（江間万里子）	- - - - - P20

舞鶴引揚記念館・復元引揚栈橋を訪ねて

平和への思いを新たに（荒川淳子）	- - - - - P22
------------------	---------------

あゝ悲愴 雲南の空に散る 回顧録より抜粋

伊藤 万平

昭和十九年八月十五日 午後十九時頃

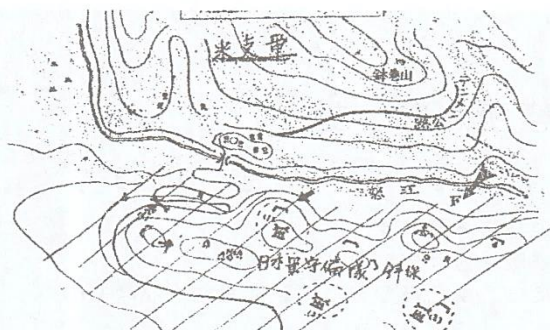
昨日まで威圧する如く、敵の砲撃一段と激しく、怒江。（ビルマ名サルウィン河。）

左岸の敵陣地より、攻撃激しく、正午近くB59爆撃機六機乃至八機の編隊を以って、我が陣地を爆撃地形異変。この間敵部隊は、我が方を取巻き包囲の輪を締めんと企図。敵は月光を利用し、一挙に絶滅せんと企図する事明らかなり。金光部隊長は玉砕を覚悟し居り、最後の巡察に副官を連れ、各守備陣地に、別れと労り言葉を掛け、途中敵に発見され迫撃砲の集中砲火を受け右胸脇腹にかけ重症。直ちに随行の西山大尉に、目は幽に笑い、呼吸も絶え絶えに。一足先に？後を頼むと最後の言葉を残して戦死。前任将校の西山大尉は直ちに指揮をとり亡骸を本部横に葬り、大隊の将校下士官を招集。金光少佐の遺影の前に主旨を確認。全員玉砕の決心を誓う。

時正に十五日午後十時、高原の抗孟陣地は満月煌々として陣地を照らし嵐の前の静寂。我が方全員合わせ、六百五十名余、武器を持って、戦える兵（もの）三百名足らず。大半は傷病者、杖、棍棒を持って、最後の勇気を振り絞り、志気旺盛。西山部隊長静かな口調で愈々最後の時が来た。皆の奮闘に依り孤立した陣地を、今迄持ち堪える事が出来た事を感謝する。有難う。一同別れの水盃をして揃って靖国神社に行こうと萬才を三唱して敵陣目指して、足の不自由な兵（もの）は轉がって又は這って、戦友の肩に掛まり、肌身離さず持って居た手榴弾を発火と共に敵兵に組み付き自爆。

一瞬の内に爆発音雄叫びも消え、静寂に戻る。師団長の命令で陣地最後の状況を報告する任務を受けた木下中尉と木村兵長は座して手を合わせ、陣地下り、二百軒後方の司令部へと敵中を突破して、十日後辿り着く。

抗孟：援蒋ルートの要街で近くを怒江が流れ惠通橋架かる。



米支軍 150万

八路軍 6万 火炮200

昭和15年末頃より制空圏は聯合軍

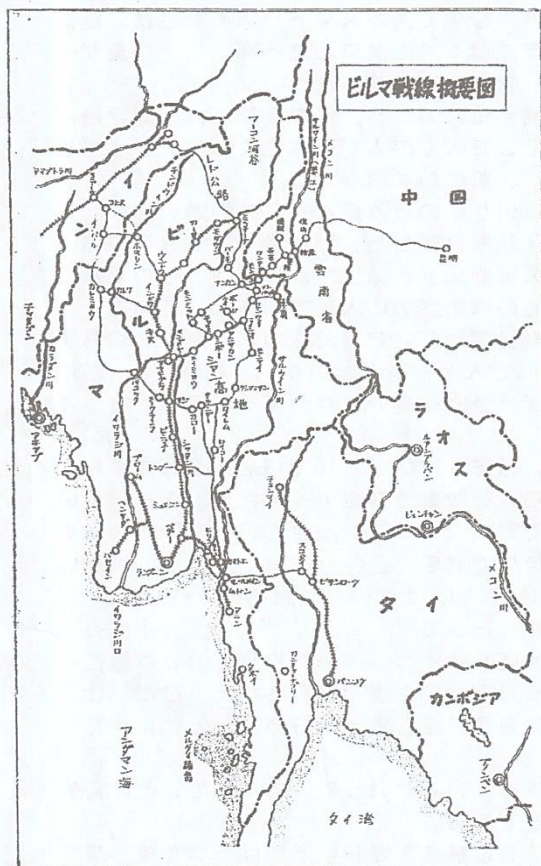
日本軍

雲南作戦 15,000

インパール作戦 240,000

英印軍 160万

内訳 英印軍130万



有松裏に捕虜収容所があった

佐野 みつ子

私は昭和6年生まれで、現在86歳です。

昭和20年8月15日、終戦を迎えました。

広島や長崎のことを思ったら、私たちの戦争体験はささやかなものです。

親たちは戦争の情報もなく、私たちもお腹がすいたということもなかった。兄は大阪から満州経由で南洋スマトラへ派遣され、話によるとその軍艦はスマトラに着く前に沈没したと聞いた。写真が一枚返ってきてただけだった。兄は23歳だった。

私の小学校（当時は国民学校）のころ、この地域には捕虜収容所があった。大阪から捕虜200人位の人が連れてこられた。イギリス人だと聞いた。鼻が高く、肌の色は白かった。

私の家は農家で、収容所のし尿の汲み取りをこの地域の農家（7軒農家があり地元の人は7軒屋と言った）が順番に汲み取りにいていた。私が「次はお宅の番だよ」といってふれて回ったのでよく覚えている。汲み取ったものは肥溜めに入れて肥料にしていた。

捕虜の人が南京袋で食料を運んでいた。父が内緒でトマトや野菜をあげていたようだ。「おじさんトマトが食いたい」といわれ、あげると「ありがとう、ありがとう」と言いながら美味しそうに食べていた。

捕虜の人たちは陽気で、口笛を吹いたりしていた。なにかで殺されたか、病気で亡くなった人を荷車で有松の「焼き場」へ引いていた。熱田の日本車両まで電車に乗って、働きに行っていた。私たちは、小学校が鳴海だったので電車で通学していたが、この時捕虜の人と会い「かわいい」「きれい」「うまい」と頭をなでられた。（当時の名鉄電車は有松駅が終点だった）

父は「大阪で日本兵が捕虜を棒でつついたりしている情景を見て、女の人が可哀想といったら、その場で銃殺された。ひどい仕打ちをされている捕虜を見ても可哀想と言ったらあかん」とよく言っていた。

父は捕虜が「8月に戦争はすむ」といっていた、このことは終戦後に初めて父が語ったことである。

この地域に爆弾が3～7つ位落ちたが収容所には一つも落ちなか

った。たぶんここに仲間が居ることを知っていたのだろう。爆弾の落ちた田んぼは、土が捏ねられ稲が長く米が良く取れた。♪トントントンカラリと隣組♪とよく歌った。その当時の方が近所となり仲が良かった。終戦になってからのほうが食べるのに大変だった。

終戦後、此処の所長はＢＣ級戦犯横浜裁判にかけられた。そのときの証人として父は出廷したと話していた。

父は「捕虜を憎むことはしない。痛みは戦争をしている両方だ。戦争は兵隊だけではなく、女性も子供も死ぬ。戦争は良くない」と話していた。

その当時のことを今話せる私は幸せである。

戦病死があいついだ中国戦線

伊 藤 芳 雄

陸軍人を志願し名古屋の砲兵八部隊に入隊しました。出征する時、熱田神宮参拝、見送りの方々代表で挨拶。国の為死んで帰ります、の一言、家族をお願いします。誰もが言う事です。十九年三月、博多より船に釜山にわたり、それより列車で中国南京市、徒歩で一里位の所（湯水鎮）中支派遣軍栄九四三七部隊砲兵隊に入隊し、約二ヶ月の厳しい生活、そして、訓練。苦しい中、一日も早く立派な兵隊にならねばと歯を食いしばり頑張り、一期の検閲を終わりました。やれやれと思いしに、私一人のみ。中国最後の大作戦、湘桂作戦に参加するよう命ぜられ、一週間後、出発。船、列車で漢口（中支）迄、あとは長沙迄行軍です。

昼間はアメリカの戦闘機が来ますので、休息、夜行軍です。道なき道で大変です。雨降りはずぶ濡れです。道は泥々、皆んなハテマス。私も途中マウリヤ、赤痢等に、おかされ、死の一手手前でした。而し、私は幸いにも愛馬がいました。軍馬（青風）です。幸いかな、夜行軍ですので、乗る事が出来、お陰で助かりました。

戦場は地獄です。



一兵士の目線から実感するもの一

『日本軍兵士一アジア太平洋戦争の現実』吉田裕著

(中公新書・2017年)より

吉井弘和

私がお話しすることは戦争体験の当事者体験ではありません。

昨年末に出版された、吉田裕先生（一橋大学院特任教授）の著書『日本軍兵士一アジア太平洋戦争の現実』を読んで、実際の戦場での兵士の実感を想像して頂きたいと思ったからです。

以下文中引用

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

1944年3月に開始されたインパール作戦では、日本軍は山岳地帯を通過してインパールに向かった。戦後の座談会で、歩兵第58連隊に従軍した兵士たちは、「あの時の個人装備は少なくとも十貫(40kg)を超えていたと思う」「進発した時の携行品は、米二十日分(18kg)、調味料、小銃弾二百四十発、手榴弾六発、その他色々、それに小銃や帯剣(銃剣のこと)、鉄帽、円匙(シャベル)、小十字鍬(つるはし)がある。擲弾筒手や軽機関銃手は五十キロは担いでいただろう」などと語っている(『高田歩兵第五十八連隊史』)。

また、同じくインパール作戦に参加した歩兵第二五連隊の場合でも、負担量は一人では立ち上がれない重さであり、「出発準備の号令がかかった時など、亀の子みたいに手足をバタつかせても起き上がれず、かわるがわる手を引いてもらって立」ちあがったという(『歩兵第二五連隊戦記』)。

中国戦線でも、1944年に入ると制空権を連合軍側に完全に奪われたため、目的地への行軍は夜間となり、兵士をいっそう疲弊させた。

迫撃砲第四大隊の一員として、大陸打通作戦の湘桂作戦に参加した中と俊雄は「昼間の戦闘と夜行軍が幾日も続くと、将兵たちは極度な疲労と過激な睡眠不足に陥り、あげくの果ては意識が朦朧(もうろう)となって行軍の方向すら見失い右や左、後方に向かって進む戦友もいたことは事実でございます。特に雨中暗夜の行軍は大へんでした。(中略)激しい戦闘よりも、行軍による体力・気力・戦意の消耗

はとてもひどかったことは事実です」と回想している(『野戦の思い出』)

「日本軍の機械化の立ち遅れについて、元陸軍中佐の加登川幸太郎は「この軍の移動をまったく馬に頼っていたのである(中略)日露戦争から一歩もすすんでいないといわざるを得ない」として「日本陸軍は『馬の軍隊』であり『人力の軍隊』であったと酷評している(『日本陸軍の実力 第二集』)」

引用終わり

.....

今回の戦争体験を語る集いでは、特別展示体験として

調理室の一角に、10 kg、40 kgの背嚢の代わりにリュックサックを用意しました。

どれほど重いかを実感を通して、戦場の兵士を想像していただければ幸いです。

吉田裕(よしだ ゆたか)さんの紹介
1954 年生まれ、一橋大学院社会学研究科特任教授、専攻・日本近現代軍事史、日本近現代政治史

「日本軍兵士ーアジア・太平洋戦争の現実」吉田裕著
中公新書帯カバーより

戦局悪化のなか彼らはなにを体験したか

310 万人に及ぶ日本人犠牲者を出した先の大戦。実はその 9 割が 1944 年以降と推算される。本書は「兵士の目線・立ち位置」から、特に敗色濃厚になった時期以降のアジア・太平洋戦争の実態を追う。異常に高い餓死率、30 万人を超えた海没死、戦場での自殺と「処置」、特攻、体力が劣悪化した補充兵、靴に絞皮まで使用した物資欠乏……。勇猛と語られる日本兵たちが、特異な軍事思想の下、凄惨な体験を強いられた現実を描く。

* 飛翔より *

それから私たちは(その6)

夏梅誠一

私が地協書記局で働くことになった頃は、戦後間もなく荒廃した世相からようやく立ち上がった人々が、自分たちの意欲と情熱で様々なことをやり始めた時期だった。組合活動では各職場毎に十一月初旬に公演する文化祭の準備に大車輪をあげており、東京海上分会では「三年寝太郎」安田分会では「蟹工船」千代田・同和分会は合同で木下順二の「夕鶴」など、それぞれに準備を進めていた。私は「夕鶴」の手伝いをし、千代田の山本裕さんと一緒に舞台装置を作ったことが懐かしく思い出される。それと同時に進行で、迫り来る十二月一時金の要求づくりとたたかい方などを討議していた。

私の仕事は各分会対抗野球リーグ戦、コーラスの恒例練習など、いずれも若いエネルギーであふれている活動を「地協ニュース」としてまとめたり、幹事会の年次行事の方針具体化その他を知らせる議事録を作ることなどだった。そして、それらを京都市内にある15～6分会、約900人の組合員に届けることも大事な役割だった。仕事に慣れるにつれ、ニュースを分会へ届けると、顔なじみになった組合員が「仲間うち」の親しさで接してくれるのが嬉しかった。

そのころ福井で待機していた雪子が、京都で働ける職場を探し、民医連事務局などへ履歴書を送付し、その連絡を待っていたところ、中国医大で雪子の同僚だった看護婦の大塚さんから「近く、欠員が出そうなので京都へ来られたい」との連絡を受けたと私の方へ知らせてきた。「働くための準備もあるので、近く上洛したい」とのことだったので日取りを決め、当日私は二人を出迎えに京都駅へ向かった。

最後尾の車両から寝んねこに和子をおんぶした雪子をすぐ見つけ、私は提げてきた米袋らしい荷物を受け取り「ごくろうさんだったなあ」と声をかけ、すぐ背中におんぶされている和子に顔を近づけ「カッコ」と声をかけると、ニコツとして「オートちゃん」と声をあげ、忘れていなかったのが嬉しかった。

「この子ね、先月ハシカにかかって大変だったの…」馴れない田

舎生活と義父母との共同生活に雪子の苦労が伺われた。

市電タカノ停留所で降り「ここで買い物をする」などと話し合いながら赤ノ宮市場を通過して寮に帰った。初めて部屋を覗いた雪子はベニヤで囲まれたお粗末なバラック建てに驚きもせず「案外広いわね」とつぶやき、安心したような顔をした。しかし3人で暮らすのに必要な家具は何もなかったので、翌日から私は仕事の合間にみかん箱に写真集のページを剥がしたものを糊付けし、簡易ちゃぶ台などを作った。

翌朝、私と雪子は炊事場に集まった寮住まいのおばさん方の前に幼い和子を連れて行き、挨拶を済ませ、働きに出る間、和子の面倒をみてくれる人はいないかと相談した。その頃は高野寮の近くには託児所がなかったので預け先探しは難航したが、同じ寮の山田さんという人が自分の娘さんと一緒に面倒を見てくれそうだと聞き、相談に行った。

そんなある日、大塚さんが訪ねて来て、彼女の職場である白峰診療所に欠員が出たので、同じ職場で働けそうだと伝えてくれた。そして診療所の様子などいろいろ話してくれ、雪子もいよいよ働きに出るという緊張が出たのか、神妙な顔で話をきいていた。

その頃、全損保本部は作家国分一太郎と鶴見和子さんによって提唱された「生活綴方」運動に応え、全損保の役員会が「機関紙全損保」を通じて組合員に作文の提出を呼びかけた。それが京都の各分会で行われていた読書サークル等でも話題となっており、関心を持った人たちが「書いてみようか」と話し合っていた。

私が所属していた京都地協の教育宣伝部では機関紙「大文字」を発行しており、そのメンバーでも生活綴り方を書いてみようという話が持ち上がった。私はみんなに「中国時代から帰国後の様子を書いてみたら・・・」と勧められ、『ともかせぎ』という綴り方を書いた。それを次号・次月号に掲載したいと思う。

（その7） -ともかせぎ（その1）-

雪子もいよいよ勤めに出る。僕らにとってこのさいなんといっても頭痛になるのは和子のことである。

満二ツと一寸を越したばかりの和子は、やっぱり何処の子供にもひけをとらないお母アちゃん子である。たとえば母親が一寸流しへ

茶碗をでも洗いにしようものなら、クルクルと大きな目玉でせまい部屋を眺めまわし「いない」と嗅ぎつけるや下駄もひっかけずにバタバタと廊下へ出るなり（僕らは旧陸軍病院の引揚寮にすんでいる）「オアアチャン！」と泣きだす始末だから、そんなときには隣のおばあちゃんの持ってきてくれたサツマ芋のむしたのも、山田さんのおねえちゃんの「カッコチャン、アソボ」という声も、もう目にも耳にも入らない。ともかくお母アちゃんがあらわれてくるまではわめきつづけるのだからどうしようもない。

二人とも勤めるということはそれだけに容易に気持ちも決まらなかった。

「山田さんへあずけるなら一応は安心できると思うんだが、親切だしそれに信頼のできる人だし」

「そう、あのおばあさんならいい人だしみてやると言われのなら願ってもないことだけど、だけど和子が私のそばから離れておとなしくしているかしら、それを考えると仕事につけてもやっぱり気苦労だわ」

「だけど、和子だって中国にいた時は、一日中でも託児所にあずけっぱなしの時だってあったじゃないか」

「そりゃ、向こうにいたときは、オッパイだってキチンキチンとやりにいけたし、おひるやすみには一緒に遊んでやることもできたし、それに設備でも何もかも条件がちがうわ」

食事時だとか帰りの遅かった夜などきまってこの話しが出て又いつもこの辺から途絶えてしまう。

「中国にいた時には…」と一応は強気でいったものの、引揚げてからもう1年近くもたっており、発育ざかりの子供心にはそんな樂園など夢にだって出ないだろうことは万々承知の上だし、それだけに不安がないでもない。

たしかに乳幼児の身心に対する中国医大の配慮は細心だった。

いつだったか託児所の責任者からソヴィエトの教育者であるマカレンコの教育方法について懇切な指導があったことを覚えている。

「人間の個性は満五ツ前後までの環境が決定的に影響する。…子供を叱りつけることは絶対にいけない、叱るということはその事で親の癪癢はおさめられても子供が納得して親の意向に服するわけではない…」等、たしかに子供の教育というものだけに通用するというものでない蘊蓄の深い言葉であったし、それだけに只可愛いとかいう事だけですまされないものもあった。

（その８） -ともかせぎ（その２）-

しかし八方手をつくして、履歴書を出しているうちは「矢張りともかせぎをやらんことにはどうにもならないんだから」と話しあった上でのことであり、いろんなところへ当たっているうちは何とか早くと、採用の知らせが鶴首の思いだった。

ところが二、三日前に大塚さんが“貴女、大体きまりそうよ”と知らしてくれたときは、「私、なんだか胸がつまりそうですぐどう返事していいかわからない位だった」と言っていた雪子の気持ちもうなすける。

それでもこれでやっと田舎へも少し位の送金も出来る。考えてみれば、十年以上も生死の程もわからず父にしてみれば「終戦後の四、五年うちもんはもうあきらめていたな、瀬戸のところでお前の初めての手紙を見たときは夢みたいでしばらくは本気にできなかった」位だったんで、そのような帰国早早のよも山話のなかには、それでもひょっとするとどこかでという一まつの望もかけられていたこともその言葉の裏にはうかがえる。永い京都市役所勤めの恩給で細々と老いた命をそのことにのみつないできたような父に少しでもまじな暮らしをと思えば、何だかホッとした安堵の気持ちにもなってくる。

いよいよ就職ときまってあと四日で勤務だといっている雪子は一年半ぶりの看護婦生活を思い浮かべて「中国の病院とは何から何までちがうだろうしねえ」と聞いてきた病院のことなど話しながら、取越苦労な事も考えてみたり、なんとか勤めるのにござっぱりしたものをと洗濯や服の改造にも手がはずんでいた。病院の方で二、三日様子を見に来いって言われるから、そのあいだに和子をおばさんのところでなれさせると言っているのも僕もいい機会だと思った。

その日の晩、雪子は「和子ネ、私が忙しそうにして一寸変わった格好をしているのを見て、おかしいと思ったんでしょね、一日あとをおってるの、おばさんにだっこされている間に逃げだしたら、廊下を曲がる辺でもうエーと泣き声がしたけど仕様がなし・・・でも辛かったわ、だけど帰った時は案外元気だったんで聞いてみたら、しばらくして泣き止んで案外おとなしかったんだって」という事だったので、この分ならそう心配したもんでもないぞと思い一寸気も晴れた。スースーと軽い寝息をたてている顔をのぞきこんだが、ポーッと紅いホーッペタや薄い唇などにどうやら健康そうになった

と思えるが、それにしても一寸いじらしい。

今日、帰るなり、第一日目の勤務の感想やら何やらを「どうだった」と聞いてみた、雪子は勤務のことはあとまわしにして「私が帰って鍵をあけようとしたら、和子が丁度おばさんと廊下へ出てきたところで、私をみつめるなり「オカアチャンオカエリ」って手をひろげてバタバタ走ってくるのをお隣のおばあちゃんがみていたの、そしてね、おばあちゃんが和子に「オカアチャンどこいったの」って聞いたら「メンメアメチャン（大きな目玉の人形のかいてあるキャラメルをこういつていた）コーテキタノ」ってもう泣きもしないで、私のひざにのっかかっているのをみて、おばあちゃんが「カッコちゃんには泣かされますよ」って目をしょぼしょぼさせているのよ」といったが、そのことの返事でもないような「・・・みんないい人ばかりだなあ」とつぶやくような言葉が出てしまった。

こんな人たちがどうしてあえぎながら暮らさなければならないかを又考えさせられたものだから。

【追補】 この綴り方運動に参加した三十篇は「蛍光灯」と題する新書版として発行された。初めて活字になったこの本を手に取り、嬉しかったことを覚えている。その後は紛失していたことも忘れていたが、飛翔前号を読んだ旧友のSさんから、「蛍光灯」を差し上げたい、と願ってもないお話をいただき久しぶりに読んだ。奥付は一九五五年発行 頒布料金五十円（物価年表によると当時ラーメン四十円・市電十二円・コーヒー五十円）どれも高度成長前の貧しい時代を生きた私たちの「綴り方」だった。



老耄つれづれ（十六）

病歴・病院・医師のことなど（二）

長井 大

つぎに私が病院の世話になったのは、北京でのことだった。鉄道技師の父は、朝鮮、満洲、華北と植民地の鉄道敷設にしたがって北上し、私が小学校に入る二年前には、父と家族は北京に移住していた。

小学校いや、私の入学した年から、ナチスのフォルクス・シューレに倣って国民学校と改称され、私は北京城北国民学校の一年生だった。

みんなで学校うれしいな

国民学校一年生

と歌って学校に通っていた。

その冬の十二月八日に第二次世界大戦が勃発したのだが、その少し前のことだと思う。私がストーブのそばで寝転がって本か雑誌を読んでいると、弟がやってきて、ストーブの上にあったヤカンをひっくり返した。私は半ズボンに黒い長靴下をはいていた。母が急ぎ、靴下を脱がすと、私の両足の皮膚は全部、靴下とともに剥がれたそう。母は応急措置に卵を割って私の足に塗ったといった。

翌日、母は私をロックフェラー病院に連れていった。「その治療がよかったので、お前の足は火傷の痕を残さずにすんだ。」これまた母に何度も聞かされた言葉だった。いざというときには日本人の病院に行かず、ロックフェラー病院が頼りになることを邦人（当時十万人いた）は知っていたのだ。私は世界一の財閥・ロックフェラーの名を自分の火傷で知ることになった。

十二月八日に開戦すると、北京のまちを憲兵隊のサイドカーが走り、敵国のアメリカ人はみな逮捕された。私の火傷は通院できるときの出来事で幸運だったのだ。

それからながい時がながれ、敗戦国日本の企業が世界の各地で経済活動を展開するようになった。私はソニーやトヨタなどの大きな企業が、自分たちが活動している国に、病院や文化施設をつくればいいのに、という思いをしながら、外国を歩いていた。

もっともソニーやトヨタをロックフェラー財閥と比較するのは桁

がいくつか違うほどの差があるが。

私は戦後二回中国を訪問したが、北京には行っていない。風の便りによると、かつてのロックフェラー病院は、いま北京だけでなく、人民中国の医療の最高の研究機関になっているようだ。

国民学校の二年生か三年生のときだった。私たちが住んでいた十一胡同二十号の路地を出たところに、日本人の医師のする藪医院があった。

私は近所の悪童どもといっしょになって、藪医院の前で、「この病院は藪医者だ」「藪医者だ」と大きな声で叫んだりしていた。

ある日、私は蜂におでこを刺され、泣きながら母に連れられて藪医院のドアを叩いた。診察室に現れた中年の穏やかな感じのお医者さんで、私の額にアンモニアを塗ってくれ、「ちょっと我慢したら、痛くなくなりますよ。」と優しく言ってくれた。私は子どもながら、自分が藪医者と言ったことを恥じ、生涯忘れられない思い出になった。

でも、藪氏が医師になったら、やはり藪医者にちがいないなあ。

幼少時代のこと、記述が前後するが、少年・青年期になって、献血をする機会が何回もあった。その際、マラリアに感染したことはないか、と問われ献血から除外された。朝鮮半島にいたとき、長男の私と次男の弟の幼児二人がマラリアに罹り、母は難儀したと聞かされていたが、どんな病院でどのような治療を受けたのか、全く覚えていない。

昭和二十年八月にわが国は敗戦の憂き目にあい、人々は戦災の跡地で「国破れて山河在り」の日々を暮らしていた。私たち一家は、子どもが六人いるだけの、家もなにもない引揚者の生活を静岡ではじめた。祖国日本は、中国北京で懂れていたのとちがい、人情・風俗の潤いを失った社会に変わっていた。

いま、潤沢な食の環境に暮らしていて、肥満だ、糖尿病だと、医療や健康管理に忙しい。

戦後の食糧難の時代は私も少年期で、空腹ではあったが、病気には無縁だった。病気と言えば、たまに風邪をひくぐらいのものだった。

いのち永らえて、平和で豊かな時代に生活させてもらっている。八十三歳の身に十指に余る病を抱えて介護されているのは何たる皮肉だろうか。



* 戦時体験記録 *

戦闘中負傷現認書 (第1集掲載文)

橋詰四郎

【資料】

負傷者 荒木 貞夫

元所属部隊 関東軍第六国境守備隊歩兵10中隊1班

当時直属上官

関東軍司令長官 陸軍大将 独立今世第135旅団長 陸軍少将

不朽第37562参謀 陸軍少佐 独立歩兵第797大隊長 陸軍大尉

歩兵第10中隊長 陸軍中尉 第10中隊第1班長 陸軍軍曹

負傷 状況

発生年月日 昭和20年8月9日

発生 場所 満州黒河省瑯瑯(アイグン)朝水東山陣地

状況 ソ連軍戦車と歯の立たぬ死闘中

負傷 箇所 右眼外傷強膜裂傷及び右上腕盲管銃創

(盲管銃創：弾が体を貫通せずに体内に止まったこと)

処置 方法 眼は硼酸で洗っただけ、腕はリパノール液を塗っただけ。戦闘中で衛生兵携帯薬品以外の処置は不可能であった。

武装 解除 昭和20年8月21日

入 ソ 昭和20年9月15日

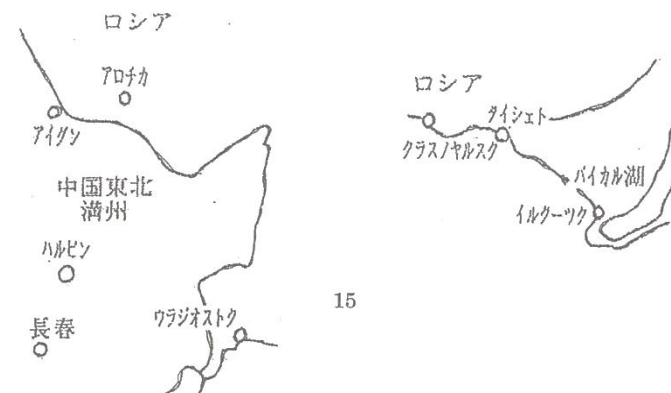
上記現認す 昭和62年1月1日

現 認 者 橋詰 四郎

元所属部隊 関東軍第六国境守備隊歩兵10中隊1班

以上相違ありません。 現認者 橋詰四郎 以下余白。

(現在は個人情報保護法により個人を特定できる情報は掲載しておりません)



この「負傷現認書」は、正月の支度をしていた昭和六十一年十二月三十一日、郵便書留速達便で届きました。

荒木はシベリアのアロチ炭鉱で強制労働をさせられ、昭和二十四年生還してきて、医師の診断書を添えて、傷病軍人の申請をしましたが、「事実を証明する人」が必要と断られ、三十八年間私（橋詰）を捜し、「証人」を依頼し、再申請しましたがなぜか却下されたままです。

今回の「戦争体験を語り継ぐ集い」に、消える言葉でなく残る文字で、氏名はもちろん、住所も発表したいと頼んで、了解を得ました。の電話で話したのは六月の中旬入梅の真っ最中。毎年今ごろは「敵弾」が暴れると、元気の無い声でした。私は思う。荒木が死んで火葬の後、子どもや孫が竹と木の箸で骨を拾うとき、鉄の固まり「敵弾」をどのような気持ちで拾うのだろうか。長い間、天気の良いとき苦しめてきた「敵弾」そして日本の国も認めてくれなかったことを。子どもや孫までも悲しいこと、これが戦争です。

私も、シベリアのクラスノヤルスクで強制労働を強要され、私は引揚者でない、「生還者」だと言っています。

ナチスがユダヤ人を大量に虐殺したことは皆さんも知っている通りです。戦争が終わって、ユダヤ人はこれで殺されなくなったと喜びます。本当に心から喜びます。

シベリアへ強制連行された日本人は、戦争が終わってから、平和になってから、ソ連軍の銃口に狙われながら、酷寒、飢餓、重労働、疫病の中で、二年から十年「死の重労働」をさせられ、六万とも七万とも云う日本人が死んでいるのです。平和になってからでも死ぬのが戦争なのです。ですから、戦争をしないように皆で心掛けて下さい。今年の五月二十七日私は舞鶴にいました。シベリアから生還した人達が祖国への第一歩を踏んだ棧橋が復元したからです。募金活動で二千六百万円集め完成しました。

その時「私のお父さんはシベリアの何処で、どのような死に方をして、何処に埋められているのですか？教えてください。」と、言う人が二人もいました。平和な日本で、まだまだ戦争を引きずって生きている人が大勢います。

戦争、子どもと一緒に考えて下されば嬉しいです。

（資料：現在は個人情報保護法により一部の情報は掲載しておりません）

父親のような兵を殴る若い将校

竹内登美子

私が小学生の時太平洋戦争に突入した。昭和十六年十二月八日、私が二年生の時でした。この戦争は私達にとって勝利のことばかり報道され、態勢が悪くなるとその様子は余り聞かされなかった。直接戦争を体験したわけではないが、間接的に大いに体験しました。

戦争が激しくなるにつれ、若い人や、働き盛りの人々は軍隊に入り、つまり召集令状が届き、有無を言わず、お国の為に命を捨ててと、家族や、友に見送られ出征していったのです。私も度々そんな光景に出逢いました。私達小学生は出征していった人々のあとを守るのだと心に誓い、通学しました。防空頭巾をかぶり手には教科書ではなく、竹槍を持ち、三十分程道を歩きました。

校庭は食糧不足のため畑にし、芋や豆を作っていました。そして校庭の囲りには、等身大のわら人形が建てられ、私達は毎日そのわら人形を竹槍で、えい！と突く練習を真剣にしました。今にして思えば、相手は鉄砲に向かって来るのに、わら人形の心臓すら突けない私達に何が出来ると言うのでしょうか。それでもその時は、何としても銃後は私達で守らねばの信念で頑張ったのです。

警戒警報が発令されると、急いで下校します。途中で空襲警報に切り変わると、何処の家でもいいから、その家の防空壕に入れてもらいなさい。との先生の指示で、余所の家の防空壕に逃げ込みお世話になりました。

この頃は食料も配給で、十分な食事出来ず、食べ物「さつまいもの粉」「豆かす」「いもづる」などでした。空腹のため食べるのですが、登校の途中に何度も嘔吐しながら、通いました。

夏休みには、軍馬の餌用として、草刈りをし乾草して束ね「とみこさんは何キロ」と誉められるので一生懸命草集めをしました。又、稲穂が実る頃、袋の口に竹筒を差し込み「いなご」を捕りました。来る日も来る日も頑張って捕り、学校へ持っていきました。

又、友達の家族が出征し、人手の足りない家には田植え、稲刈りと手伝いにもいき慣れない作業のため辛い思いもしましたが、みんなで助け合わなければと頑張りました。どんなに働いても、私達の食事は粗末でした。

米粒は数えるほど、そこにきざんだ大根を沢山入れてのお粥です。

でも豆かすよりは少しはましだったと思います。戦地ではお国の為に戦っている兵隊さんのことを思って、感謝していただきなさいと常々躡けられました。

私の家は名古屋市熱田区と、この大高町に保育園とお寺がありましたが、熱田の保育園は空襲で爆弾が落とされ、人が亡くなると、その死体を園庭に積み上げ、それからそれぞれの焼場に運ばれたと、留守番をしていた人に聞き、恐ろしいことと思いました。昭和十九年、父も応召の身となり、家は年老いた祖父母と私と妹になりました。

まもなく保育園は軍需工場と兵舎になり、寺の方も本堂、座敷、離れ座敷、そして庫裡まで軍隊に接収されて、私達四人は六畳一間での生活となったのです。寺の釣鐘からお地藏様の杖に至るまで、鉄や金属類は、弾丸を作るとかで供出しなければならなくなったのです。

時折見かける軍人さんの行為は、非人道的で、まるで日本人同志の戦場のように思われ落胆しました。若い将校が自分の父親のような上等兵を、スリッパや靴でなぐりました。少しでも、反動で体が傾くと、また反対側からなぐられていました。すべて連帯責任で、さ細なことで痛めつけられている姿を見せつけられ、心が痛みました。こんなことをしてて、日本は本当に戦争に勝てるのか、と思いました。夜、軍に電話が入ると軍人さんは、靴のまま私達の布団の上を無言で踏みつけ、電話をしていました。これらの様子を見ると、戦地にいる兵隊さん達は、どんな思いで敵軍と戦っているんだろうかと思いを馳せました。

昭和二十年五月一日、熱田の保育園は名古屋の空襲で灰燼と化しました。ここは四年そこそこだったが、母と共に過ごしたところ。大切な母の思い出が残された唯一の場所だったので、焼失したことはとても辛く悲しかった。悲しさに堪え、相変わらずの通学を続けました。

昭和二十年八月十五日、先生から「天皇陛下より大切なお言葉があるから、姿勢を正しくして聞くように」と言われた。教室のスピーカーから流れてくる陛下のお言葉は、雑音も多かったし、私達にはほとんど聞きとれず、何が何だかわからなかった。あとでそれが終戦と聞かされたが、それでも誰も日本が戦争に負けたのだとは、口にしませんでした。

毎日が芋など入ったご飯の思い出

緒川文子

私は父が戦死し、祖父たちと暮らしていましたが、有松にも爆弾や焼夷弾が落ちるようになり、母は5人の子供を連れて、中津川へ縁故疎開しました。小学校2年生（昭和20年）の4月頃のことでした。

中津川へ移動するとき名古屋駅で爆撃にあったことは覚えていません。中津川市はのんびりと「ああB29が飛んでいく」と空を眺めていました。

縁故疎開とはいえ、食べるものはなく、ご飯の中に大豆が入っていたりトウモロコシが入っていました。大根をみじん切りにしてご飯に見立てて炊いたが、水でベチャベチャでまずかったです。麦ご飯は良いほうで、トウモロコシは口の中でゴツゴツして嫌いでした。

終戦間近に有松に帰ってきましたが、依然食べるものはありませんでした。配給される食糧ではお腹を癒すことはできません。幸い母の実家が農業をしていましたので、母は自転車で米や野菜を買いに行きました。祖父も自転車で南瓜や芋など野菜を詰めるだけ積んで買い出しにも行きました。当時は警察の取り締まりが厳しく、お巡りさんに捕まり、没収されたこともあったようです。

終戦後も食べるものはなく、毎日芋粥、汁の多いおじや、お芋などを食べていました。5歳の弟は食べたくないのか、当時は停電が多くロウソクで夕食をしていましたが、団子汁の団子を箸に串刺しにして炙って遊んでいました。

あの当時の思い出が今も消えず、麦ご飯は嫌いです。美味しい米のご飯がいいです。

戦争なんて真っ平！平和がいい！！



銃後の暮らしの体験

江間万里子

第二次世界大戦は、昭和20年8月15日に敗戦となりました。しかし私の父は、15日のわずか1週間前8月7日に、豊川の海軍工場の爆撃によって戦死しました。

母はその時妊娠していました。戦争中も残された妊婦はお産をしました。

母は助産婦だったので、8月7日も身重な体で産婦の家にいてお産の介助をしていたようです。夫が務める豊川の空襲が激しくなり、何度も警戒警報のサイレンが鳴り響き、その都度産婦を防空壕に避難させながら介助をしていたと聞きました。豊川方面の空が真っ赤になり、もう夫は、生きてはいないだろうと、ぼーっと空を眺めていたそうです。

その日、父は自転車で出勤していたので、夕方になると自転車の止める音が聞こえると、もしや帰ったのではと戸口まで出てみたりしたそうです。何日かたって、豊川海軍工場の全滅だったと伝え聞き、夫も亡くなったことを知ったそうです。

母は、12月に弟を出産しました。食べ物が少ない中で過ごしたせいか弟は、生まれた時からひ弱でした。育たないかと心配しましたが今日まで生きてきています。感染症にも罹りましたが抗生物質など良い薬は、軍にしかなく何度も命が危なかったと聞いています。そんなわけで、大人になっても体はか細いままでした。

母は、3人の子供をかかえて、夫の死を悼むよりこの子たちをどう育てるか、途方に暮れたそうです。親戚が集まり一人ずつ預けるように勧められたようです。が、自分で3人を育てる決意をしたそうです。私が小学校を卒業するころまで、今でいう乳母のようなおばあさんがいました。自分たちの祖母だと思い込んでいました。母は、その人に子守を手伝わせ、必死に助産婦業をして、それこそ昼も夜も働いて3人を育て上げました。その頃は、どの家庭も貧しく分娩費を払えず大根、芋、まめ、米などを分娩費の代わりとしてもらっていたと聞いています。

ご飯には、必ず芋か、豆、大根などが混ぜてありました。後で聞いた話に「誕生日は何にするか？」と聞かれると妹は「おかゆ」と

答えたそうです。お粥なら白いコメのままの物だったようです。私は豆ごはん特にそら豆の混じったご飯が好きだったらしい。そのころ草類は何でも食べられました。笹だけは食べることが出来なかったそうです。畑も少し借りてサトウキビなども栽培していたようです。甘いものは何もなくサトウキビの茎をかじるのがおやつでした。柿やイチジクなど美味しいおやつでした。

あるとき漬物に使うサッカリンというものが手に入りました。砂糖の代わりになるという話を小耳にはさんだ私は家人がいないときにこっそりつまんで食べてみました。すると甘いどころかとんでもない味のするもので、びっくりしてその場から逃げた覚えがあります。5歳頃だったと思います。砂糖も米も配給だったことを覚えています。

夜遅く家計簿をつけている母と起きていると隣の八百屋さんからみかんを貰って食べれることを覚え、眠いのにな母のそばで起きていた覚えがあります。鶏も飼育していました。卵は弟しか食べれませんでした。男子であったこととひ弱であったことで、私と妹は食べませんでした。肉は、たまに鶏を漬して、すき焼きのようにして食べたのを記憶しています。ウサギの肉も買いに行かされたのを覚えています。自分がそれを食べた覚えはありません。

警戒警報がなると、裏の畑の奥に防空壕があり、非難しました。乳母におばれて避難したことを覚えています。飛行機が低空飛行していた時背中におばれながら聞いたあの爆音が忘れられません。行きついた防空壕の中は、真っ暗で一人ぼつんと置いてきぼりになり、非常に怖かったのを今でも覚えています。3歳か4歳の頃のことでしたが、三つ子の魂百までか、大人になるまで飛行機の爆音は嫌いでした。今また緑区の空に旅客機ではない、多分自衛隊の戦闘機が飛び交うようになってその音が気になっています。

母は、夫を亡くして子育てをしながら、その時その時の話を子供の私に聞かせていました。母は、私が4歳を過ぎたころ心労と疲労で寝込んだことがあります。私は親戚のお寺に預けられましたが、夜になるとお腹が痛いと言ったそうです。お寺には、お葬式饅頭なるものがあって、私に食べさせてくれたようで、その饅頭のせいで痛くなったかと大人達は気をもんだそうです。今思えばホームシックで神経性胃炎のようなものだったかもしれないと思います。

戦争が終わっても、ゲームのようにすぐに元に戻るわけではなく、戦争中も戦後も日々の暮らしは、大変な苦労であったと聞いていま

すし、その体験もしてきました。

2度と再びこのようなことが起こらないよう、若い人たちに伝えていきたいと思います。

* 舞鶴引揚記念館・復元引揚栈橋を訪ねて *

平和への思いを新たに

荒川淳子

5月、舞鶴は一年で一番良い季節を迎えるそうです。

「戦争は二度と起こってはならない」「平和が大好き」

「平和な日本が続くように自分のできることをしたい」

5月19日、この思いを持ち続ける仲間の皆さんと「舞鶴引揚記念館&復元引揚栈橋を見学するツアー」に出かけました。

前日の雨が嘘のように晴れ渡った名古屋の空を眺めながら、総勢34名を乗せてバスは出発しました。鳴海⇄舞鶴(220km)の長距離移動の始まりです。途中、米原を通り過ぎ日本海側へのトンネルを抜けると、空が一変しました。新潟の友人が「日本海側は青空が見えるとすごく嬉しいの!」と言っていたことを思い出し、これから向かう舞鶴に、その向こうにあるシベリアへと思い馳せていました。三方五湖パーキングエリアでは冷たい霧雨の中でした。「寒い寒い」「晴れていたら三方五湖がもっときれいに見えるのに」と呟きながら、舞鶴へと向かっていました。極寒の地シベリア、その極限の寒さは想像すらできませんが、私はこの日本で、春の寒さに文句を言う、なんて贅沢なことでしょう。



バスの中では、戦争の歴史に詳しい方にお話を聞き、DVDを見て、事前学習をしました。

舞鶴での最初の立ち寄り地「舞鶴赤れんがパーク」に到着です。バスが駐車場に入るにつれ、隣の海上自衛隊の艦艇が見えてきました。その圧倒される大きさと砲台などを目にとると、戦争

であろうと、日本を守るという位置であろうと、あの砲台が使われないことを祈るばかりです。この建物は明治36年(1903年)に旧舞鶴海軍の魚雷倉庫として建設されたそうです。昼食に「海軍カレー」をいただき、少しだけお買い物を楽しみました。

続いて、今回の目的の一つ「舞鶴引揚記念館」へ向かいました。冷え冷えとした霧雨の中、建物に入り、ビデオを観て、館内を見学しました。ここからは「舞鶴観光ガイドボランティア:けやきの会」



から2名のボランティアガイドさんが同行くださり、ていねいなご説明に、理解が深まりました。実際にシベリアの捕虜収容所の建物や、暮らしの様子も再現されていて、現存されている服や食器、手紙などが展示されていました。

「岸壁の母」「岸壁の妻」小さいお子さんを抱えながら、ご家族ごと舞鶴に転居して夫を待つ、毎日毎日足を運び子どもを待つ、その痛みの大きさは計り知れません。シベリアから日本に届けられる手紙は当然ながら検閲が入ります。不自由な歯がゆい思いでも、無事であることを伝えたい一心で書かれたことでしょう。白樺の皮に書かれた手紙は強く印象に残っています。

「舞鶴のお母さん」と呼ばれる方々が手厚く迎えてくださったことは、どんなにか嬉しく心も身体も温まる思いだったことでしょう。自分の生活もままならない状況の中、そうされた、そうせざるを得ないほどの思いを受け取ってきました。



「復元引揚栈橋」は、後世に残す平和への強い思いと誓いが形として残されていることを感じました。人間として生きるという意味を考えさせられました。風景は当時と違いますが、栈橋に立つことで、日本に帰ることを支えにしながらも叶わなかった人たちの御霊に思いを馳せ、苦難を生きてこられた皆さまの命がつないでくださったこと、それを引き継いでいくとはどんなことなのか、自分なりに感じていました。

希望と絶望が入り交じるその時代を、この舞鶴は抱え続けてくれたのだと感じました。引き揚げが昭和33年まで続いていたことは、

恥ずかしながら知りませんでした。

聞いたこと10% 見たこと15%

聞いてみた時20% 話し合った時40%

体験した時80% 教えた時90%

学びによる知識がどれだけ自分のものになったか、という割合です。戦争に関しては、体験は全く必要ありませんが、疑似体験として心に刻みたいものです。今回、現地で見るという体験は、これまで体験者の皆さまから伝えていただいたことが、じんわりと沁み込んでいく感じでした。人間の残忍さ、それが引き出されていく、そうせざるを得ないところへ追い込んでいく、追い込まれていく、どのような立場であっても、このようなことを体験する出来事が二度と起こらないようにと、改めて思いました。

220Kmの長距離&見学という体力も要るツアーでしたが、体調を崩される方や怪我をされる方もなく、元気に帰ってまいりました。それぞれが平和への思いと誓いを新たにした一日でした。

ぜひ一度、舞鶴へお出かけください。そして、ガイドさんの説明をお聞きください。あなたの愛する人と共に、笑顔で暮らせる一日が永遠に続きますように。(祈りを込めて)

【語り部の鐘】

一打 強制抑留中死没された方々の招魂・慰霊

二打 強制抑留 引揚の苦難顕現

三打 平和祈願 不戦の誓い

引揚を記念する舞鶴全国友の会



編集後記

今年、戦争体験を語り継ぐ集いは第30回、戦時体験記録集は25集という節目を迎えています。昨今大変な事件が多く起こっています。戦争は起こっていないのに、言葉の暴力、無関心という名の暴力が増えているように感じます。特に子どもの世界は大人の世界を映し出していると言われます。私たちの心の中に戦いは無いでしょうか？さまざまなところから平和へとつなげていきたいものです。

この5月に舞鶴という地へ行く機会に恵まれ、舞鶴引揚記念館と復元引揚棧橋を目にし、「平和を守る想い」を新たにしました。

記録を後世に残すという一年一年の積み重ねを今後も続けていきます。この記録集を通じて、折に触れ平和を愛する心を育む機会としてご覧いただければ、幸いに存じます。

地域の皆さまへ、そこから広く社会へとつながることを祈ります。日本の未来が優しく穏やかなものでありますよう願います。



第30回 戦争体験を語り継ぐ集い

平成30年7月21日開催 戦争体験を語り継ぐ集い実行委員会

この冊子は古紙パルプを含む再生紙を使用しています